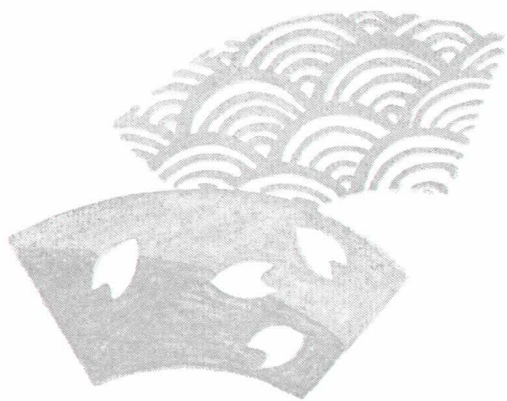


女形余情 戸板康二

女形余情 戸板康二



三月書房

女形余情 おんながたよじょう 定価一四〇〇円

昭和六十二年六月十五日発行

著者 戸板康二

発行者 吉川志都子

発行所 三月書房

〒101 東京都千代田区神田錦町三―六

電話 〇三―二九一―三〇九一

振替 東京一―五三二二五

印刷 壮光舎印刷株式会社

カバー 錦明印刷株式会社

製本 松栄堂製本所

©Yasuji Toita 1987 Printed in Japan

0095-0112-2737

283267

I313. 65

J3495

三月書房の随筆集

2313.65

34PS

おとしの恋人	戸板康二	1400
句集花すこし	戸板康二	1700
演劇走馬燈	戸板康二	1700
目の前の彼女	戸板康二	1200
午後六時十五分	戸板康二	1400
五月のリサイタル	戸板康二	1400
ロビーの対話	戸板康二	1400
芸能めがねふき	戸板康二	1000
わが交遊記	戸板康二	1400
女優のいる食卓	戸板康二	980
フランス見たまま聞いたまま	寺尾尚	1800
四季・七十二候	石川涓吉	2300
軽井沢日記	水上勉	1200
交奏曲	福原麟太郎	980
望遠鏡	萩原葉子	980
旅よそい	円地文子	980
中国の芸と芸人	岡本文弥	980
芸渡世	岡本文弥	1700

桃栗三年あと八年	岡本文弥	1400
新感字時代	扇谷正造	1300
好食一代	狩野近雄	1700
野椿	松下隆章	2800
墨水墨堤	東陽一	3000
随筆七月子(なつこ)	巖谷大四	1700
随筆花影	武田太加志	2000
韓国・インド・隅田川	小沢昭一	1700
わたしのたんす	花柳章太郎	1700
龍が見える時へ作品集	木下順二	1700
仁左衛門楽我記	片岡仁左衛門	1700
聞きかじり	見かじり	1700
木鉄	前島康彦	1800
大福帳	辻嘉一	1200
仕入帳	辻嘉一	1200
たべもの草紙	楠本憲吉	1400
オトコの料理	友竹正則	980
ウィーンと私	李 清	2500

女形余情
目次

I

女形余情

II

五代目中村福助 二代目中村成太郎 二代

目市川松蔦 七代目尾上榮三郎 三代目坂

東秀調 十二代目片岡仁左衛門 四代目尾

上菊次郎 大川橋藏 四代目中村時藏 三

代目中村時藏 中村魁軍 三代目中村梅玉

女形異彩

44

中村芝翫 四代目中村富十郎 市川門之助

二代目中村芝鶴 河原崎国太郎 五代目片

岡愛之助 中村歌右衛門 十六代目市村羽
左衛門 中村雀右衛門 三代目尾上多賀之
丞 中村扇雀 五代目中村歌右衛門

名優の御馳走

76

六代目尾上菊五郎 七代目沢村宗十郎 初
代中村吉右衛門 十一代目片岡仁左衛門
十五代目市村羽左衛門 四代目沢村源之助
二代目実川延若 七代目坂東三津五郎 六
代目尾上梅幸 初代市川猿翁 七代目松本
幸四郎 七代目市川中車

II

ひげの英雄

「六歌仙」の回想

嫉妬と怨念の芝居

「演劇界」戦中戦後

利倉さんとの四十年

川口松太郎さん

秋桜子先生の芝居の句

名曲受難

146 139 135 129 126 121 116 111

加藤剛の「波」

昆劇女優張継青

小村雪岱

小泉喜美子さんの遺著

III

わが処女作

直木賞回想

文庫と私

鷗外のボタン

184 181 177 175

169 157 154 149

好きな詩

思い出のメルヘン

若き日の私

ワインと私

忘れがたい一杯

ばんめし

印象的な祝辞

あだ名

地名の魅力

街頭の曲芸師

217 213 208 206 204 201 197 194 191 188

日本料理の海外進出	220
ことしの梅若忌	223
車中で会った人	225
ヨーロッパの森	229
湖畔の塚	234
天津の演劇博物館	238
中国曲芸の学校	241
中国人のもてなし	243
後記	247

装丁 福井三知

女形余情

五代目 中村福助

女形は歌舞伎の花である。演技はむろん、大切な条件であるが、美しさというものが、やはり観客には、その役者の印象として、永く残る。余情である。

むかし見た人、あるいは歿した人の中から回想してゆくと、春芝居のころに、かならず思い出すのが、いまの芝翫の実父、五代目福助なのだ。

「演劇界」の去年の十一月号に、児太郎の時鳥のカラー写真があって、祖父（といっても実感は全くないが、祖父にはちがいない）の福助のおもかげが、じつにあざやかに偲ばれる表情で写っていた。昭和八年、三十三歳で世を去るこの女形は、生来持っていた気品が群をぬいていた。父の五代目歌右衛門も、貴族的なムードのあった人で、それが大輪の花の風格に熟したのだが、この歌右衛門の時姫を三宅周太郎氏は日輪にたとえ

ている。

ここに書く福助は、そういう華やかさではなく、花ざかりといっても、桜というより紅梅の趣があった。

ぼくは最後の役になった「髪結新三」のお熊も見ているが、新三の内で救い出されて駕に乗る町娘の美しさはたとえようもなく、この場面が見納めになったわけだが、六代目菊五郎の新三が惜しそうに見送る顔が、格別だった。

この菊五郎は、自分が九代目團十郎に教わったように、歌右衛門に托されて、「娘道成寺」を教えたりしている。昭和のはじめにはずっと一座に招いて、「一本刀土俵入」のお薦のような、まるで質のちがった役の成功を、共演しながら感慨ふかく味わったはずである。

仮にベスト5をあげることになると、このお薦をまず数えたあと、「勸進帳」の義経、九段目の小浪というあたりが、出て来るのだが、べつに、ぼくは「実録先代萩」の花献上の局^{つぼね}たちの先頭にいた福助の何ともいえない美しさをおぼえている。

だが、もうひとつ、「石切梶原」の梢という傑作があった。

この役はさしたる見せ場もなく、お光、お染、すしやのお里、お三輪などにくらべると、あまり力の入れようのない役ともいえる。若い女形でも、梢では、まず失敗はせずにするのである。しかし、昭和七年一月の歌舞伎座で見た福助の梢は、じつに大変な役

のように見えた。十五代目羽左衛門の梶原で、六郎太夫は十三代目勘弥だった。

勘弥は同じ年の夏に奇病で死ぬのだが、この六郎太夫は何とも見事な力演であった。その後に見た、たとえば八代目團藏の同じ役とは、感触がすっかりちがった、人間的な彫りさげのある舞台だったともいえる。

娘をうちに帰らせて、二つ胴の一人になる覚悟をした青貝師が、呼びとめて仏壇の灯明のことをいうあたりの味は無類で、そういう老父に対応した梢に精一杯の伎倆がひき出されたのかも知れない。

この芝居は上から梅の釣り枝がおろされる。福助の梢は、あたかも、この梅の花が人の姿になって出ているようでもあった。

福助の歩き方には、ちょっとした癖があつて、左手で胸のあたりを軽く抱くような形をよくした。梢の花道の出に、そういう姿があつたのを、今でもハッキリおぼえている。お里やお染とちがって、まじめで、ひたすら夫につかえている女の役が向いていたとも思われる。

この梢たったひと役が、福助の口跡を残したSPで売り出され、近年、LPに複製された。

「あれもし父さん」のせりふまわしが、なつかしい。